

地域を彩る

vol. 18


 文・井上貴至
 地域のミツバチ

他市町村を見習わない

愛 媛県伊予市双海町は、全国でも珍しい夕日をコンセプトにしたまちづくりを続けている。きっかけは、東京から取材に来たNHK記者。JR予讃線の上灘駅を乗り過ごし、次の下灘駅で待っていた時に、ホームからの夕日のあまりの美しさに見とれてしまったという。以来、町役場の若松進一さんを中心に、下灘駅を「日本で一番海に近い駅」と売り出し、「夕焼けプラットホームコンサート」を毎年開催。青春18切符のポスターにも取り上げられ、無人化された駅が注目されるようになった。

その成功を受け、1995年に整備した「ふたみシーサイド公園」。当時の町の予算から考えて莫大な投資。反対意見も多かったが、主導した若松さんの議会答弁が面白い。「もし赤字になればどうするんですか」「黒のボールペンで書くんです」

美しい砂浜、海、そして夕日を満喫してもらうため、若松さんは毎朝5時から黙々と掃除を続けたという。「たった12年だよ」と若松さん。そして、次から次に新たな仕掛けを展開。海を越えたモアイ像、童謡「夕焼け・小焼け」、恋人の聖地……。夕日に関わるものは、どんどん利用した。

砂浜が潮に流されるので、当初は毎年数千万円かけて砂を入れた。次に石を積んで砂の流出を防



軽トラ市で子供たちに囲まれる富田さん

いだ。すると春分の日と秋分の日に、ちょうど夕日が石の穴の中に沈む新たなオブジェが誕生した。「他の市町村を見習わない。見習ったら規模の大小の勝負になる。オンリーワンなら自分たちの汗と知恵があればできる」とは、若松さんの名言。

「沈む夕日が立ちどまる町双海」は全国から注目を集めたが人口減少は止まらない。そうした時に地域おこし協力隊として移住したのが富田敏之さん。「もともと双海のことには知らなかった。東日本大震災をきっかけに西日本に住みたいと思っただけ。しかし市役所の松本宏さんがすごく熱心で迷わず双海に決めた。最初は何をしていいかわからず、全世界帯に話を聞いた」

そのときの経験が富田さんの原点。「600世帯の多くが良い人ばかり」なことに心底驚いたという。ならば、双海の人が集まる場所をつくろう、と始めたのが軽トラ市。当時は珍しく、「新車はあるのか」と聞かれたこともあったというが、すぐに定着。簡単に出店できるからこそ、地元の人たちも新しいものを試してみることができる。人気の鯉カツパーガーも軽トラ市で大好評だ。

夕焼けプラットホームコンサートは地元の人が意外に少ない。そこで地元の小学校の合唱団に歌ってもらうことにした。子供が集まれば大人も集まる。翌年度からは小学校の授業にも取り入れてもらった。下灘駅に関心が高まるにつれ、列車に向かって手を振る人も増えた。それが観光客の評価につながり、今や台湾から四国を巡るツアーで双海町は欠かせない存在になっているという。



いのうえ・たかし ● 1985年大阪生まれ。2008年総務省入省。15年4月から地方創生人材支援制度第1号として鹿児島県長島町役場に赴任。7月から副町長。週末は地域の隠れたヒーローを訪ね歩く。「ミツバチが花粉を運ぶように全国の人をつなげたい」